

佳作

胸を張って

岩手県宮古市立宮古西中学校

2年 上野 胡羽

私のあこがれる人、それは母親である。理由はいくつかある。私を含めた3人の子どもをこれまで育ててくれて、いつも家族のことを考えている。私には子どもはいないけれど、3人の子どもを育てる苦労や大変さは何となく分かっているつもりだ。もし、自分に将来、子どもができた時、母のような優しさを持って育てていきたいと、心から思う。

私は小さい時、母にこんなことを言ったことがある。

「私はいっちゃん生まれ変わりなんだよ。」と。「いっちゃん」というのは、生まれる前に亡くなった私の姉だ。いっちゃんについて何も知らないくせに、なぜそんなことを言ったのか分からない。今考えれば、子どもらしいとても無神経な発言だったと思う。それなのに母は、

「そうだったんだね。」

と笑ってくれたのだ。その時、母はどう思ったのか分からない。本心でそう言ってくれたのかもしれないし、もしくは自信満々で言う私に合わせて笑ってくれたのかもしれない。今さらあの時どう思っていたのか聞いても、きっと母は覚えていないだろう。私ですら、どうしてこの会話を覚えているのか、少し不思議だ。でも、覚えていてよかった、とも思う。当時は気付かなかった母の優しさに、今ようやく気付くことができたし、気付くきっかけをくれたのだから。

私の姉は他に二人いる。大学2年生と高校3年生の優しくて面白いお姉ちゃんだ。親の遺伝なのか、二人とも成績が良くてテストの点数は毎回と言っているほど高得点で、妹として誇りに思う反面、大きなプレッシャーが心のどこかにひそんでいた。二人は優秀なのに、私だけテストの点数が低かったらどうしよう、とか、親の期待に応えられなかったらどうしよう、とかネガティブな考えしか思いつかない日もしばしばあった。私もお姉ちゃんたちに続かなきゃと、必死に勉強して迎えた1年生初めてのテストでは、姉には及ばなかったものの、良い点数を取れた。父も母も「頑張ったね。」と褒めてくれて、少しだけ自分に自信がついた気がした。でも、あるテストで、今までの点数より大きく低い結果になってしまったことがあった。父や母は、きっと冗談で言ったんだろう。姉と比べるようなことを言った。冗談で言ったことは自分でも理解していた。でもその瞬間、やるせなくて逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。私の努力が足りなかったのもあっただろうが、私は部屋に駆け込んで、ふとんの中で

泣いた。お姉ちゃんの頭が良くなかったら、なんてみにくい考えも思い浮かんで、よけいに涙があふれた。そんな時、真っ先に部屋に入ってきたのは母だった。私が泣いているのが分かると、すぐさま背中をさすって何度も謝った。涙でぐじゃぐじゃなのにもかかわらず、私を抱きしめてくれた。うそだよ、ごめんねと私の頭をなでてくれた。そしてこう言ってくれた。

「こっちゃんはこっちゃんだから。」

そう言われた瞬間、心がフッと軽くなった気がした。いつも姉と比べて、「姉に続かなきゃ」としか考えられていないのは私の方だったのだ。そう気付かせてくれたのはやっぱり母の優しさのおかげであり、私はいつも母の優しさに支えられていきているんだと実感した。私の自慢の母であり、私のあこがれている人物である。

10年後の私へ。私は自分に自信がある人間になりたい。この夢は、ちゃんとかなっているだろうか。それとも、まだその人物像とはほど遠い人間なのだろうか。もしかなっていなかったとしたら、今の「自分」の願いを思い出してほしい。私が学校でつらいことがあってもすぐ気付いてくれたり、話を聞いてくれたりしてくれた母にあこがれていて、自分に自信のある人間になりたいと思ったということを、忘れないでいてほしい。もし、これから大きな壁にぶつかったとしても、「私は私だ」と胸を張って生きていくことが、目標である自分に自信がある人間になるための第一歩だと思う。私も頑張るから、10年後の私も頑張るね。自分が納得のいく人間になれたその時は、母に笑顔で、

「あなたのおかげでこんなに立派に育ったんだよ。」

と胸を張って堂々と感謝を伝えられるように。